

深谷昌志著

## 『昭和の子ども生活史』

(黎明書房、2007年)

原田 彰 (広島大学名誉教授)

著者の深谷昌志氏は、博士論文である『良妻賢母主義の教育』(黎明書房 1965)の刊行以来、数多くの著書を著してこられた。その中でも、とりわけ「子ども」に焦点を当てた研究は、長期にわたっており、その業績の蓄積度はきわめて高く、氏の「子ども」研究が果たした先駆的な役割は、多くの人たちが認めるところである。

「子ども」研究における深谷氏の関心は、「現代の日本の子ども」に向けられている。だが、その研究を支えているのは、「国際比較」と「歴史的比較」という2つの「比較」の視点であることに注目する必要がある。つまり、「現代の日本の子ども」は、「国際比較」という横軸と「歴史的比較」という縦軸のうえに位置づけられるのであり、このことを踏まえて研究を進めようとするところに、氏の「子ども」研究の基本的な特徴があるといっていよう。

2つの「比較」のうち、「歴史的比較」のほうに目を向けると、「子ども史」研究が浮かび上がってくる。この種の研究は従来からそれなりに行われてきているが、深谷氏はとりわけ「子どもの生活史」、すなわち「子どもの暮らしの歴史」に関心を向ける。

深谷氏によれば、「子どもの生活(暮らし)」は、衣食住や生活用具(「モノ」)や生活費を土台としながら、基本的には「遊ぶ」、「学ぶ」、「働く」という子ども独自の3つの領域から成り立っており、それらのありようは、時代の文脈に応じて変化するものでもある。したがって、「子どもの生活史」とっては、これらの3つの領域における子どもの生活の実態とその変化を時代の文脈の中でとらえることが問題となる。氏の場合、明治以降の「子どもの生活史」が研究範囲となっているが、すでに刊行された『子どもの生活史—明治から平成』(黎明書房 1996)が十分に扱っていない「昭和史」が、本書では詳細に取り上げられている。

具体的には、①昭和初期、②戦時、③戦後、④テレビ普及期、⑤昭和末から平成へという時期区分が行われており、それぞれの時期には「遊ぶ」、「学ぶ」、「働く」の各領域の記述が含まれている(ただし、⑤は、頁数の都合から省略された)。

この研究を進めるための資料としては、とくに(1)子どもを対象とした調査によって得られたデータと(2)自伝の中に記された子ども時代の生活実態に関するデータが重視されるとともに、(3)学校史・地方教育史、児童文化、福祉、労働などの資料も参考にされ、さらに(4)「昭和」の時代を生きてきた氏自身の個人史(昭和8年生まれ)も加えられる。本書で使用される資料は、氏が長期にわたって丹念に収集を重ねてきた膨大なものである。

しかし、たとえば自伝から得られる資料は、その人の育ちによって、都市と農村、職業階層などの違いからくる偏りがある。それだけでなく、深谷氏は、本書を「(東京の)下町生まれの男子で高学歴を取得し専門職を仕事とした者の昭和史の試み」(12頁)と位置づけ、氏と異質な育ち方をした者が、それぞれの子ども史を描くことによって、子ども史を総合していくことの必要性を訴えている。ここには、氏自身が行う「昭和の子ども生活史」研究の

限界に対する謙虚な姿勢があらわれている。

ところで、深谷氏がめざす「子どもの生活史」は、『『子ども』の生活』の事実史であり、『『子ども』論の歴史』(「子ども」の思想の歴史)ではない。しかし、本書の中には、たとえば阿部進の「現代っ子」論をめぐる議論が取り上げられている(268 - 273頁)。「子どもの生活史」の中に、ある時代に生まれた「子ども」論についての記述が入り込むのは、どういう理由によるのだろうか。「子ども」論のあらわれ方を事実として記述するということかもしれないが、そうなると、各時代の人々が子どもとその生活をどう受けとめたかを問題にすることによって、「子どもの生活史」の中に『『子ども』論の歴史』を一貫した形で含めることが必要になるのではないだろうか？

本書では、深谷氏は、研究者自身が子どもの生活の事実をどう意味づけるかについて記述することに禁欲的であるように見える。しかし、そういう記述が、きわめて少ないとはいえ、見出されないわけではない。たとえば、氏は、昭和初期の「群れ遊ぶ子どもたち」に関する事実を丹念に収集・記述したうえで、当時の子どもの「遊び」について次のように述べる。「俗的なものにあこがれる子どもと俗を禁止したい大人。こうした俗をめぐる子どもと大人の関係は、本書の中でも、これから先同じ構図がくり返し提起される。メンコやベーゴマを例にするなら、賭け事であることを考えると、学校が賭ベーゴマを禁止するのは妥当な対応だと思う。しかし、大人の禁止を振り切って、メンコをするのが子どもらしさだった。大人に逆らう勢いを持つのが子どもだという気持ちがある」(32 - 33頁)。ここに見られる「俗」や「子どもらしさ」といった観念は、子どもの「遊び」の事実をどう意味づけるかという問いから出てくるものだと考えられるが、そうなると、「子どもの生活史」を記述する研究者自身の「子ども」論が、改めてとらえ返される必要があるのではないだろうか？

深谷氏のいう「子どもの生活史」が、『『子ども』をめぐる制度の歴史』ではないことは、いうまでもない。しかし、学校で「学ぶ」子どもについての事実を記述するうえで、学校という制度のありようを取り上げないわけにはいかない。それはそうなのだが、私の疑問は次の点にある。学校は、「子ども」を「児童・生徒」にすることによって授業や行事が成り立つ場所だと考えられるが、「子ども」の生活と「児童・生徒」の生活との間には、ズレ、矛盾、対立、葛藤が不可避免的に生まれるのではないか。また、「働く」ことにかかわる制度(たとえば徒弟制度)のもとでは、「小さな大人」(「子ども」という観念には収まらない)がそれなりに「一人前」になっていくプロセスがあるのだが、しかし、「働く子ども」という観念は、「児童労働の禁止」(「就学義務」と裏腹の関係にある)という近代的観念とともに生まれてきたのではないのか？ これらは私が勝手に抱いている疑問だが、深谷氏の著書の中にその答えを見出したい、という思いが私にはある。

「子どもの生活史」の中で、「子ども」にかかわる諸観念(たとえば「子どもらしさ」)の発生・発展・変化・終焉を事実としてどう記述していくべきなのか？ この種の疑問への答えは、すでに深谷氏の別の著書の中で取り上げられているようにも思われるので、たとえば『『子どもらしさ』と「学校」の終焉』(黎明書房 2000)、『子どもから大人になれない日本人』(リヨン社 2005)などとあわせて読み直す必要があると考えられる。